
ふたりぼっち

nakoso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりぼっち

【NZマーク】

NZ399D

【作者名】

nakoso

【あらすじ】

キミとボク。今この瞬間、ふたりぼっち。

「あれえ？　ゴーくん、紅茶の缶は？」

キッチンの引き戸の中にもぐりこんだ彼女は、よこしょ、とその矮躯を引き抜いた。

「紅茶の缶は？」

「切れたよ」

ぼくはと声をひそめながら、ページの上ページと本を読んでいた。

ペラリ、ページをめくる。

「えー、飲んだの？」

「飲んじゃいましたー」

「どーしてー？」

「喉渴いてたから」

「紅茶はあたしが淹れるって言つたの?」

彼女の苛立ちを如実に物語る、どすんど響く足音がベッド脇にまで近づくと、どすんと背中への重圧に変わった。

「重つ」

「吐け」

「え」

「飲んだ紅茶、全部吐け」

「吐いてもいいけど、胃酸まみれだよ?」

「紅茶だけ抽出して吐け」

「無茶言つな」

「エスプレッソ抽出で」

「もう紅茶でもないじやん」

「吐け~」

背中に跨つてなお喚く彼女はさておこて、ペラリページをめくる。

「ね

いともたやすく観念してくれた、彼女の体が胸中に密着。

肘を立てて浮かせたぼくの胸に細い腕が絡み付く。

「何読んでんの？」

「戯曲集」

「シロイクスピア？」

「お笑いです」

「お笑い？」

「コント戯曲集」

「何それ

「コントの戯曲集……イタイイタイ」

耳を引っ張らないでください。

「ね

今度はぼくの髪をいじりながら、彼女。

「紅茶飲んだってことは……淹れたのは?」

「ぼくだよ」

「ほんとに?」

「ほんとに」

「ちゃんと淹れられた?」

「淹れられたよ」

ペラリ、ページをめぐる。

「で、誰に淹れてあげたの?」

「ぼくに」

「うそよー。」

ひと際高い声が非難を伴つて耳を刺した。

「じゃあこの口紅は誰のよー。」

「あつかやんのでしょ」

「このマーキュアはどうのよー。」

「あつかやんのでしょ」

「ヘアピンなんて使わないじゃなー。」

「あつちゅさんのでしょ」「ふう

振り返らずとも、一連のやり取りを楽しんでいる表情が手に取る

よつてわかる。

そして決まって、いつも聞いてくる。

「好き？」

だから決まって、ぼくは言つた。

「好き」

「いいね~」

体を押し付けるよう、彼女に強く抱き締められる。

もし彼女が判子ならば、今頃ぼくの背中は彼女だらけだ。

ハグが好きな彼女は、前から後ろから、いつでも抱き付いてくる。彼女自身をぼくに[写す]ようこ、何度も何度も、きつへ強へ。

「ね、ね

「はい？」

ぱりり、ページをめくるぼくの手を、彼女が止めた。

「紅茶、美味しく淹れられた？」

「淹れられたよ

「ほんと?」

「つそ

「やせなじゅうそじゅない!」

まだ続いてたんだ、それ。

「楽しそうだねー」

「うん、すごく楽しいー」

声からして躍っている彼女の手を押しやり、ぱりつ。

「あつちゅんの淹れてくれる紅茶が一番です」

「素直でよろしい

ぼくの視界を遮った彼女の手が頭を撫でてくれる。

やわらかい、彼女の手。

やわらかくて温かい、彼女の手。

撫である。撫である。

撫でる撫でる。

撫でる撫でる撫でる撫でる撫でる。

「ひひひひひひひ」

しまじこめぐるめぐるん、ぼくの頭が振り回された。

「好き？」

「好き」

「あたしの淹れる紅茶、飲みたい？」

「飲みたい」

「じゃ、明日買つてきて」

絶対くると思った。

「いつもの店でいい？」

「いつもの店で、いつものブレンンドで」

「しかと承りました」

「よし」

満足げに意気込んだ彼女はすっくと立ち上がり、もう一度だけぼくの背中を抱き締めて、キッチンに向かった。

「忘れないで買ってきてよー。あたしの紅茶が飲みたいでしょ、コ

……ヒロくんは」

ペラリ、ページをめくって聞いていないフリ。

「一くん。彼女の、前の彼氏。

もう口に墨染んじやつして 前に、申し訳なさそうに書いた彼

女。

そのうち治るから、ね？ そう言つてはくれたけど。

「一くんの家には、まだ紅茶の缶があるんじゃないかい？ あつちゃんと淹れてくれるのを待つて、紅茶の缶が。ペラリ、ページを戻して、またペラリ、ページをめくる。鼻歌まじりに調理を始めた彼女を横目で見る。

紅茶淹れるのへタね。

カノジョの声が三半規管で回った。

あたしの妹の方が、何倍も上手よ？

彼女は紅茶を淹れるのが上手だ。

カノジョは男を虜にするのが上手なのだろう。

……ま、いってことさ。

ペラリ、めくつたページに書かれた「了」の文字を見る前に本を閉じる。

今この部屋には、ぼくと彼女だけ。

本を枕元に放つて、足が向かつ延長線上には彼女。栗色パーマを揺らす彼女。

茶色ストレートを搔き上げるカノジョ。

カノジョの微笑が頭を過ぎって、彼女の鼻唄が止まった。緩く流れる栗色パーマが振り向く前に抱き締める。

彼女とカノジョの髪は同じ匂い。

「好き？」

決まって彼女は聞いてくるから、

「好き」

決まってぼくは答える。

ま、ま、ま。いってことなのぞ。

今はまだ、答えなんて。

わかっているのは。

今この瞬間、部屋にはふたりぼっち。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7399d/>

ふたりばっち

2011年1月20日04時39分発行